

東京大空襲とすみだ

すみだ郷土文化資料館専門員 田中禎昭

1945（昭和20）年3月9日17時15分、325機のB29がサイパン・テニアン島を出撃、東京上空に侵入し、10日午前0時7分から約2時間40分間、焼夷弾を1665トン投下した。いわゆる東京大空襲である。爆撃対象は、アメリカ軍により「焼夷地区一号」として指定された、旧浅草・本所・日本橋区全域を含む隅田川周辺の下町である。アメリカ軍は指定地区全域を焼き尽くすため4箇所の照準点を設定し、各地点周辺にB29の群団を均等に配備し、平均2000mの低高度からレーダーを用いて攻撃した。まずB29先導隊が瞬発的な火災発生能力をもつM47焼夷弾を約30m間隔に投下し目印となる火災を発生させ、次に本隊が侵入して、M69という小型焼夷筒38発を一つの弾頭に束ねた集束焼夷弾を高密度にばらまいた。M69はナフサネー卜・ヤシ油などの油脂に水素を添加したパーム油と、亜鉛・鉛・ガンリンなどを配合したゼリー状の可燃剤（ナパーム剤）を袋に詰めて充填したもので、着弾と同時に可燃剤が外に飛び散り、家屋等に付着して激しく燃焼する仕掛けになっていた。それは木造家屋が密集する市街地では恐るべき威力を発揮し、隅田川周辺一帯を火の海と化した。火災は、折から吹く北西の強風に



世田谷区から見た火災旋風（脇 三夫 画）

あおられ、甚大な人的・物的被害をもたらした。犠牲者は10万人以上に及ぶと推計されている。

現在、資料館では、当時の警視庁と気象庁の記録を元に空襲時における火災列の発生状況を把握し、火災拡大の実態を明らかにすべく研究を進めている。以下、墨田区を中心にして、その調査結果の一端を紹介する。

本所地区では、最初の火災が午前0時8分、太平で発生、それが錦糸町、江東橋で発生した独立火点と結びつき、地区東側を連ねる大火災列が生まれた。

これが本所地区最初の火災列である。一方、午前0時19分頃、隅田川西岸・浅草方面に火災列が発生。その飛び火によるものか、北部の向島・小梅地区が延焼する。その後、緑・堅川（立川）・菊川・柳原（江東橋五丁

目）を結ぶ南部方面にも火災列が発生。石原・亀沢、東駒形・厩橋（本所）を結ぶ地区中央部の火災列は遅れて発生した。つまり本所地区の東部、西側（浅草）と北部、南部の順に火が周囲を取り囲むように火災列が形成され、最後に中央部が燃え、結果的に地区全域に被害が及んだのである。私たちはしばしば「炎に取り囲まれ逃げ道をふさがれた」という証言を聞くが、それは客観的データからも裏付けられる真実なのである。

次に向島地区の火災列発生状況であるが、被災地域では最も遅く、午前0時30分頃に最初の火災列が寺島町二丁目南部（東向島二丁目南部）・吾嬬町西一・二丁目（押上）を連ねる線上に発生した。次いで寺島町六・七丁目（東向島北部）、吾嬬町西

五・六丁目（八広南部）の順に発生し、これらの火災列が一つに合流した後、隅田川・荒川放水路沿いと寺島町の一部地区等を除く残りの地域を全焼させた。なお向島、本所、浅草、深川、城東方面が「大火流の状態」を呈したのは、午前2時10分以後という記録がある。東京管区気象台の資料によれば、風が最も強くなったのは10日午前3時、北北西の風、風速12・7m/sであり、恐らくこの時が火災の最も激しかった時間帯であろう。また同時刻の天気は「曇」と記録されているが、その前後はすべて「晴」か「快晴」となっている。つまり「曇」とは天気のことではなく、午前3時頃、東京の空を広く覆った、恐るべき「火災の煙」を表しているのである。さらに被災地には火災旋風と呼ばれる火の竜巻が発生し、それが世田谷区から見たという証言も残されている。

東京空襲では、空襲時の火災状況、犠牲者数など被害の正確な実相を客観的に記録した資料が際だって少ない。今後、同じ過ちを繰り返さないためにも、多角的な資料を駆使して精密な被災実態の復元を進めていくことが求められているのである。

（平成22年度後期すみだ地域学セミナー ご講演より）